国立循環器病研究センター　校内研修会

―小児植込型補助人工心臓装着患者の就学支援－

本校訪問教育部

１　はじめに

本校訪問教育部には国立循環器病研究センターに入院して臓器移植を待つ児童生徒が在籍している。同病院に入院する児童生徒は、特に入院期間が長期化する傾向があり、学習を行う上でも地域校との連携、学習状況、体調等心身の状態など教員が配慮すべき点も多い。また、今年度は退院後の生活や地元校への復学に向けた支援について考える機会も多かった。そのため、退院に向けた児童生徒への支援において配慮すべき点などを知っておくことが必要と感じた。そこで、本校では毎年国立循環器病研究センターに入院する児童生徒について学ぶ研修を行っている。今年度も研修会が行われ、国立循環器病研究センターの医長と副看護師長の２名のお話を聞かせていただいた(図)。

２　概要

日　時　　令和５年８月 29 日（火）14:00～16:00
場　所　　本校２階多目的ホール
講　師　　坂口　平馬医長
　　堀　由美子副看護師長
対　象　　当校教員
テーマ　　小児植込型補助人工心臓装着患者の就学支援

３　臓器移植の現状

まず、補助人工心臓(VAD:バド)には体外式と植込型の２種類がある。体外式で小児に認められているのは体外式補助人工心臓 EXCOR(エクスコア)のみである。これは、約 100kg の装置から 2m の管が出ており、その管が体内に繋がれている。そのため、EXCOR を使用している場合の行動範囲は 2m 以内であり、さらに移動が必要な場合は転倒防止等のため、医療者の付き添いが必要となる。

埋込型の VAD で小児に使われているものとして HeartMate3 があげられる。平成 31 年 4 月に小児の使用が承認され、体外式よりも行動での制限が少なく、自宅での生活も可能となった。

しかし、国内において VAD を管理できる施設は少ない。VAD は生命維持装置でもあるため、危機管理や日常生活ケア、さらに緊急時対応が必要となる。そのため、24 時間アラームが聞こえる範囲でトレーニングを受けた介護人が同居する必要があり、植込施設から遠い場所に住んでいる家族の場合、施設の近隣に引越しをするケースも少なくない。

４　手術後の生活

手術が終わった後の生活として、1 ヶ月程度はクリーンルームに入る必要がある。その

後、リハビリ等で病棟に行くことが可能となり、手術から２ヶ月程度で退院となるが、手術後の傷が悪化して再入院のリスクもあることから、半年程度は在宅での生活が必要である。また、カテーテル検査の必要があるため、退院後も定期的に入院をする必要がある。

退院後は地元校に在籍となるが、自宅療養をしながら学習を行うことが難しく、学習の遅れが懸念される。そのため、授業時間の確保や学習の継続が課題となる。

登校が可能となった場合、遠足は参加可能な場合が多いが、修学旅行等の宿泊を伴う行事は施設などの関係で参加できないことが多い。そのため、復学して登校ができるようになったとしても、他児と同じように全ての行事に参加することが難しい。

５　まとめ

日本移植学会(2021)によると、移植を受けるまでに平均 675 日(約２年)、最長で 1764 日(約５年)かかっていたことが明らかとなっている。そのため、臓器移植待ちの児童生徒の入院期間は長期となり、本校訪問教育部への在籍期間も長期に及ぶ。新型コロナウイルスが５類感染症となり、今後は臓器移植の件数も増えてくることが予想される。また、復学してからも授業時間の確保や学校生活にも課題がある。今回の研修で学んだことを活かし、継続的な教育支援と退院してからの復学がスムーズに進むよう支援を行うことが必要と考える。